

## 漢字本『老乞大』の異本について

竹越 孝

### 1. はじめに

一般に「今本」あるいは「新本」と称される系統の『老乞大』は、i) 漢字本『老乞大』(刊年不明)、ii) 『翻譯老乞大』(中宗12年[1517]以前刊)、iii) 『老乞大諺解』(顯宗11年[1670]刊?)、iv) 平安監營重刊本『老乞大諺解』(英祖21年[1745]刊)の四類に分かれ、漢字の部分に関してこれらはほぼ同一の内容を持つとされる。

このうちiの漢字本『老乞大』については、『奎章閣叢書』第九(京城帝國大學法文學部1944)とその再印本(亞細亞文化社1973、聯經出版事業公司1977)及び『奎章閣資料叢書・語學篇』一(ソウル大學校奎章閣2003)に収められる影印が通行している。これらの影印はいずれも同一の底本、すなわちソウル大學校奎章閣に所蔵される「奎6293」を用いたものであるが、現在一般に漢字本『老乞大』と言えば専らこの本を指す場合が多く、漢字本『老乞大』にこれ以外の版本が存在することはあまり知られていない。

そこで、本稿では先行研究に基づいて韓国に所蔵される漢字本『老乞大』の異本を紹介するとともに、『奎章閣叢書』に見られる欄外の校記から伺い知ることのできる他本の状況を示すことにしたい。

### 2. 漢字本『老乞大』の諸本

管見の限り、漢字本『老乞大』の現存諸版本に関する最も詳細な書誌的記述は安秉禧(1996)である。同論によれば、漢字本『老乞大』には少なくとも四種類の異本が存在するという。いま同論に基づいてそれらの概略を示すと以下のようなになる：

A) 甲寅字覆刻本：山氣文庫(旧名通文館、李謙魯氏旧蔵書)蔵。木版本、不分卷一冊、全48張、うち第4、47、48の三張は改刻。字画の磨耗がなく初刷本と思われる。版式は四周単辺、半郭の大きさ24.6×16.8cm、有界10行、一行17字。版心は白口で上下に内向黒魚尾があり、その間に版心題「老乞大」と張数がある。魚尾は15世紀後半の刊本によく見られる形であり、紙質が16世紀前半の楮紙であることから、15世紀後半に成立した甲寅字本を16世紀前半に覆刻したものと推定される。また、同本には原所蔵者が書き入れたハングルによる漢字音注(『翻譯老乞大』の左側音と一致)と漢字またはハングルによる注釈(『老乞大集覽』の記載と一致するものがある)が見られるほか、欄外の余白に「嘉

靖二十六年丁未 [1547] 二月十八日置簿 戊申 [1548] 十二月十五日 下等 二十四日 楊州除授」(1a 右上)、「戊申年 [1548] 殿講略 是年秋 又逢粗」(17b8-10 上)、「辛亥 [1551] 春 殿講略」(27a7-8 上)、「丙辰 [1556] 春 殿講略」(47a1-2 上)、「嘉靖廿八年己酉 [1549] 六月十八日 到楊州 是夜夢遊於完北宮 主上牕角乘一男子云云」(48b 余白) 等の墨書が見られることから、同本の刊行は 1547 年 2 月以前であることが知られる。

B) 弘文館旧蔵本：ソウル大学校奎章閣蔵（蔵書番号：奎 5158）。巻頭に弘文館の蔵書印。木版本、不分巻一冊、全 48 張、うち第 6、9、14、46 の四張は補写（紙質は他の張と類似）。全体に印面がぼんやりしており後刷本と思われる。版式は四周単辺、半郭の大きさ 24.1×16.5cm、有界 10 行、一行 17 字。版心は大黒口または白口、魚尾は黒魚尾と花紋魚尾が混在している。各套話の始まりは藍筆の「ㄣ」で示され、上欄外に套話番号が記されている。また、句読点は朱筆または墨筆で行間に示されるが、最初から印字されている張もある。さらに、諺解本の巻上に相当する部分 (24b3) まで藍筆により声点が記入され（『翻譯老乞大』の右側音と一致）、墨筆で「一點舉字 二點曳字 無點放字 學者於此宜潛心而玩矣」(1a 右) との説明がある。

C) 侍講院旧蔵本：ソウル大学校奎章閣蔵（蔵書番号：奎 6293、奎 6294）。巻頭に侍講院の蔵書印。木版本、不分巻一冊、全 48 張。版式は四周単辺、半郭の大きさ 23.2×16.5cm、有界 10 行、一行 17 字。版心は白口に花紋魚尾が主体であるが、時折黒口・黒魚尾も見られる。版心と魚尾の形から見て、17 世紀前半の刊本と推定される。奎 6293 では各套話の始まりを「ㄣ」で示し、上欄外に套話番号を墨書する。また、句読点は行間に書き入れられているが、最初から印字されている張もある。奎 6294 では声調を示す圈点が朱筆で記されている。

D) 肅宗版：山氣文庫蔵。巻末に「康熙四十二年 [肅宗 29 年 / 1703] 四月 日開板」(下 25b8) の刊記。木版本、二巻一冊、上巻 24 張、下巻 25 張。分巻は諺解本に従ったものと思われる。版式は四周双辺、半郭の大きさ 25.8×16.8cm、有界 10 行、一行 18 字。版心は白口で上下に二葉花紋魚尾があり、その間に書名と張数がそれぞれ「老乞大上 一～二十四」、「老乞大下巻 一～二十五」の形で刻される。各套話の始まりは行を改め最初に二葉花紋魚尾を立てることによって示される。表紙に「共三」との書き入れがあることから、二巻二冊の諺解本（おそらく『老乞大諺解』）と完帙をなしていたものと思われる。

以上に挙げた諸本のうち、我々が全書を影印によって見られるものは C 類の「奎 6293」のみである。なお、林東錫（1982：509）には B 類の「奎 5158」の第一張表の影印が収められ、また B 類の「奎 5158」と C 類の「奎 6294」に見られる声点については菅野裕臣（1977）の研究がある。

### 3. 『奎章閣叢書』における漢字本『老乞大』

『奎章閣叢書』における漢字本『老乞大』の影印底本について、その解題である末松保和（1944）は次のように記している：

次に附載の「老乞大」についていふに、原本（奎複 3917-1A）は木板一卷一冊。板匡縦七寸七分・横五寸四分。本書も亦たその序・跋・刊記などを缺く。「通文館志」の卷八、什物の條によれば、當時即ち肅宗末年には老乞大の板木が現存したものの如く「老乞大板（時在槐院）」とある、槐院とは承文院の別名で、なほその板木は「刊板年月未詳」と注記されてゐる。或はこの景印原本は、該板による印出本かと考へられる。（同 3-4 頁）

また、同解題には奎章閣の所蔵にかかる漢字本『老乞大』の異本について、次のような言及がある：

さて今日まで管見に入れる「老乞大」に三本あり、何れも奎章閣圖書中のものである。その第一本はこの景印原本で、第二本（奎 3917-1A）は第一本と全く同一の板木による印出本で、用紙・印成すべて近似する。第三本（奎 3917-1）また刊行年代・場所等一切不明の本であるが、少くとも第一・第二兩本よりも古い木板本で、板匡縦八寸・横五寸五分、字詰・行數等は全く前二本と同じく、書體も近似し、第三本の字が頽れて第一・第二本となつた感じである。この第三本によつて第一本の訛譌を正し得るもの數字あるのみならず、部分的には既述崔世珙がその翻譯に加へたといふ「旁點」の名残りとも考へられるものが藍筆を以て施されて居るなど、貴重すべき本であるが、補寫四枚あり、全體としての保存状態が良くないので、遺憾ながら景印原本となすを得なかつた。（同 4-5 頁）

以上と前掲の安秉禧（1996）における記述から、末松氏が言うところの第一本（奎複 3917-1A）は C 類の「奎 6293」に、第二本（奎 3917-1A）は同じく C 類の「奎 6294」に、第三本（奎 3917-1）は B 類の「奎 5158」に対応するものであることがわかる。

### 4. 『奎章閣叢書』欄外の校記

さて、『奎章閣叢書』における「奎 6293」の影印には上欄外の余白に他本との異同を記した校記があり、我々はその校記から漢字本『老乞大』の異本、具体的には B 類の「奎 5158」の状況を伺い知ることができる。末松保和（1944）では上に引いた部分に続けて、底本と影印の相違点について言及している：

なほ景印本「老乞大」について斷つて置かねばならぬことは、景印に際して編者が削つたものと書加へたものとあることである。覽らるる如

く本書は首尾通し書きで段落を設けない。けれども古來のならばはしは全篇を百七章に區切つて讀んだものの如くその區切は、諺解では魚尾形のしるしを挿んで明示してゐる。景印原本は、諺解の魚尾しるしと一致するところに墨筆で「」のしるしをつけ、且その行の上、欄外に一二三の番號を墨書してゐる。然るに中間に於てその番號をつけ誤つてゐるので、讀者の誤解と不便とを慮つて、その墨書の番號は全部削り去つた。次に編者の新たに加へたものは、欄外の註記である。即ちそれは上述の第三本（略稱古本）及び諺解本（略稱諺解）との對校の結果を記入したものである。（同 5-6 頁）

この記述によれば、欄外の校記で「古本」と称しているものは第三本、すなわち「奎 5158」を指すことになる。なお、前半部分に言う套話番号を示す数字は、『奎章閣資料叢書・語學篇』では削除されることなく影印されている。

『奎章閣叢書』における欄外の校記は、ア)「古本」との異同を記したもの、イ)「諺解」との異同を記したもの、ウ)「原作～墨書作…」とするもの、の三類に大別されるが、そのうち「古本」に言及する校記は重複を除き全部で 22 条見られる。いまそれぞれの原文と欄外の校記を摘録すれば以下の如くである。校記の部分には\*印を付し、外字は { } 内に構成要素を示す（+は左右関係、/は上下関係を表す）：

- (1) {方(ノなし) + 文} 學。(1b5-6)  
\* {方(ノなし) + 文}、古本作放。(1b5 上)
- (2) 我師傅性兒 {彡 + 昱} 克。(3a1)  
\* {彡 + 昱}、古本作温。(3a1 上)
- (3) {良 + 元} 這般時。(8b7)  
\* {良 + 元}、古本作既。(8b7 上)
- (4) 就那裏 {木 + 米 + 文} 下走了。(10a7)  
\* {木 + 米 + 文}、古本作撤。(10a7 上)
- (5) 射了一箭。(10b4)  
\* 箭、古本作箭。(10b4 上)  
\* 箭、古文作箭。(10b5 上)
- (6) 提那其間。(10b8)  
\* 提、古本訂書捉。(10b8 上)
- (7) 且房于裏坐的去来。(11b10-12a1)  
\* 于、古本作子。(12a1 上)
- (8) 我是 {彳 + 于} 路的客人。(15a3)  
\* {彳 + 于}、古本作行。(15a3 上)
- (9) 萬里要 {人 + 車} 名。(15b3)

- \* {人+車}、古本作傳。(15b3 上)
- (10) 今年夏裏天 {目/干} 了。(18b2)
  - \* {目/干}、古本作旱。(18b2 上)
- (11a) 你從幾時 {一/又+佳} 了王京。(25a9)
- (11b) 我七月初頭 {一/又+佳} 了。(25a9)
  - \* {一/又+佳}、古本作離。(25a9 上)
- (12) {良+元} 是好銀時。(29a2)
  - \* {良+元}、古本作既。(29a2 上)
- (13) 我則問我家換。(29a6)
  - \* 問我、古本作問牙。(29a6 上)
- (14) 只要深青織金胸背段了。(33a3-4)
  - \* 了、古本作子。(33a4 上)
- (15) 咱們結相識行。休說你歹我好。(39b2-3)
  - \* 行下、古本有時字。(39b2 上)
- (16) 凡事要的慎行時。(40a4)
  - \* 約 [的]、古本作謹。(40a4 上)
- (17) 孤朋狗黨。(40a8-9)
  - \* 孤、古本作狐。(40a8 上)
- (18) 白絹汗 {ネ+三}。銀褐紵絲板摺兒短襖子。(41a3-4)
  - \* {ネ+三} 褐、古本作衫褐。(41a3 上)
- (19) 黑祿紵絲比甲。(41a4)
  - \* 祿、古本作綠。(41a4 上)
- (20a) 春裡繫金條環。(41a5)
- (20b) 夏裡繫玉鈎子。(41a5-6)
  - \* 裡、古本作裏。(41a5 上)
- (21) 不曾失的。(42b6)
  - \* 失、古本作去。(42b6 上)
- (22) 拾好你来到。(46a5)
  - \* 拾、古本作恰。(46a5 上)

以上の校記において言及されている異同は、大多数が字体の相違ないしは誤刻である。上の 22 例のうち、「奎 6293」が異体・俗体字を使用したと見なされるものは 1、2、3、4、5、8、9、10、11、12、18、20 の諸例であり、同本の誤刻と見なされるものは 6、7、13、14、16、17、19、21、22 の諸例である。同じく「今本/新本」の系統に属する『翻譯老乞大』、『老乞大諺解』、平安監營重刊本『老乞大諺解』の三本における対応箇所は、いずれも校記にいう古本、すなわち「奎 5158」の記述に等しい（ただし例 11b の“離”を『老乞大諺解』では

“雛”に誤る)。また、1998年発見のいわゆる『旧本老乞大』においても、対応箇所が全く異なる1、19の二例を除き「奎 5158」と同じ記述である。

脱字と考えられるものは例15で、校記によれば「奎 6293」における“咱們結相識行”を「奎 5158」が“咱們結相識行時”に作ることが知られ、他の三本でも同様に“時”が存在する（『旧本老乞大』では“呵”に作る）。

「今本／新本」系『老乞大』諸本の継承関係は、大まかに言って漢字本『老乞大』→『翻譯老乞大』→『老乞大諺解』→平安監營重刊本『老乞大諺解』の順序であると考えられるが（その考証の詳細については別稿を予定）、以上の校記によれば、『翻譯老乞大』以降の諸本が依拠した漢字本『老乞大』はC類の「奎 6293」（及び「奎 6294」）の系統ではありえず、B類の「奎 5158」ないしはより古い版本と目されるA類の系統であると考えられる。

## 5. おわりに

以上に述べてきた『奎章閣叢書』における校記の検討から、漢字本『老乞大』の現存諸本のうち、「奎 5158」が「奎 6293」に比してより古形を存し、より誤脱が少ない善本であることは疑いないと言える。もちろん、上はあくまで『奎章閣叢書』の編者末松氏が指摘し得た範囲での異同に基づく考察であり、今後それぞれの原本を実見した上での厳密な対校調査が必要とされることは言うまでもない。本稿はその準備作業としての覚書きである。

### < 参照文献 >

- 亞細亞文化社 1973 『老乞大朴通事諺解』，國語國文學資料叢書，亞細亞文化社。
- 安秉禧 1996 『『老乞大』 oa gy 諺解書 yi 異本』，『人文論叢』 35：1-20，ソウル大學校人文學研究所。
- 菅野裕臣 1977 「司譯院漢學書 ei 記入 doin 近世中國語 yi 聲調表記」，『李崇寧先生古稀紀念國語國文學論叢』，405-416，塔出版社。
- 京城帝國大學法文學部 1944 『老乞大諺解』，奎章閣叢書第九，京城帝國大學法文學部。
- 末松保和 1944 「老乞大諺解解題」，奎章閣叢書第九所収，京城帝國大學法文學部。
- ソウル大學校奎章閣 2003 『老乞大・老乞大諺解』，奎章閣資料叢書・語學篇（1），ソウル大學校奎章閣。
- 林東錫 1982 『朝鮮譯學考』，國立臺灣師範大學國文研究所博士論文。
- 聯經出版事業公司 1977 『老乞大諺解・朴通事諺解』，聯經出版事業公司。